

「カムイ」としての川



(上) 歴舟川 (ベルブネイ・大樹町)。

(右) 歴舟川の支流である歴舟中の川(ルウドルオマ)上流には、その名も「神威岳(カムイヌプリ)」がある。



「マレク(マレク)漁の集い」で漁の前におこなわれるカムイノミ。北海道ウタリ協会上土幌支部。(上土幌町・東泉園)

サケをとる時の「礼儀」

サケを網やマレクでつかまえ、舟や陸にあげると、太さ2~3cm、長さ30~40cmくらいの「イパクニ」と名づけられた木の棒で、頭をたたいて殺します。

ただ、このイパクニはただの棒ではなく、「イナウ」でもあります。サケに、感謝の気持ちを伝えるものなのです。

また、サケをとるときにはとりつくさないで、川の上流に住む人たちの分や、サケを食べる動物の分も残されていたといいます。

そうすることで、川や自然のめぐみ(サケや動物)をとる暮らしを、みんなですっと続けていくことができるようになっていました。

川(ペッ、ナイ)はアイヌ民族にとって、水や食べ物をおもてしてくれるところであり、道でもありました。今でも、水道水の多くが川から取られています。

つまり、川は暮らしを支えてくれる存在であり、生きていくためになくてはならないものです。

また、季節や天気、場所でそのようすを大きく変え、思い通りにならないことがよくあります。性格を持ち、気分が変わる人間のようにもあります。

つまり、川は「カムイ」なのです。そして川にはワッカウシカムイ(水のカムイ)やミントチカムイ(精霊のようなもの)などが暮らしているのです。

さらに、上流には高い山があり、そこには山の神(キムンカムイ)がいました。

現代になり、川とのつきあい方も川のすがたも変わりました。今の川に、カムイたちを見つけれられるでしょうか？

サケをとる前の儀式

アイヌ文化では、サケ(カムイチェブ:カムイの魚)が川をのぼり始め、漁を始める時、「アシリ・チェブ・ノミ(新しいサケをむかえる時のカムイへの祈り)」をおこないます。

こうしたカムイへの祈り(カムイノミ)の時には、それぞれのカムイに、木をけずって作った「イナウ(カムイに言葉をきちんと伝えるための祭祀具⁵)」をささげます。



今でもサケを殺すのに、木の棒⁴を利用する。固さや重さなどからしても、木の棒がちょうどいいという。(サケをふ化して増やすための捕獲場)

4 何かの目的(なにかのもくてき): 人にとってありがたい目的ばかりではなく、例えばパートゥムカムイは病気(とくに伝染病)をまくという目的を持っている。

5 祭祀具(さいしぐ): 神々などをまつための道具。

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん